



「図図倉庫」にある交流スペース

● トピックス ●

「実験できる余白」が人を集める

飯館村・図図倉庫で生まれる新しい挑戦

飯館村では、同村で発生した除去土壌を用いて農地造成を行い、復興再生利用の安全性の確認を目的とした実証事業を実施しています。

その飯館村に「図図倉庫」(ズットソーコ)があります。元ホームセンターを活用した「図図倉庫」は『環境と対話する実験基地』であり、研究者や学生、アーティスト、企業関係者など、さまざまな人が集まっています。この場所にはなぜ、人が集うのでしょうか。

図図倉庫を運営する矢野さんは、その理由を「実験できる余白」としていると話します。

「何をする場所か最初から決め過ぎないことが大切なんです。決まっていなからこそ、自分のやりたいことを持ち込める。失敗したっていいんです。まずやってみて、トライアンドエラーを繰り返せばいい」

矢野さんは高校生の頃から飯館村と関わり、福島第一原子力発電所事故後の地域で活動する研究者や住民の姿を見てきました。大学では建築を学び、卒業後も飯館村との関わりを続ける中で、図図倉庫の運営に携わるようになりました。

矢野さんが飯館村で面白いと感じるのは、人の挑戦が地域に与える影響が見えやすいことです。

「都会ではイベントを一つやっても街全体はなかなか変わりません。でも飯館村では、一人が何かを始めることで人が集まり、新しい動きが生まれる。その変化を身近に感じることができます」

図図倉庫も、当初から明確な完成形を目指してつくられた施設ではありませんでした。活動内容を固定せず、その時々で集まった人たちが自由に使いながら形をつくってきたといいます。

そのため、ここにはさまざまな分野の人々が集まります。

農業を学ぶ学生もいれば、デザインを学ぶ学生もいる。研究者もいれば、アーティストや企業関係者もいる。立場や専門分野が違う人たちが同じ空間で過ごし、意見を交わす光景がこの日常です。

しかし、人が集まるだけでは新しいものは生まれません。

矢野さんは、自身の役割を「翻訳者」だと表現します。



展示物を紹介する矢野さん

「この人とこの人をつないだら面白いんじゃないか、この活動とあの活動を組み合わせたら新しい化学変化が起こるんじゃないかと、わくわくしながら人をつないでいます。だけど、研究者には研究者の、農家には農家の言葉があって、それぞれが当たり前に使っている言葉でも、別の分野の人にはうまく伝わらないことがある。

だから、こちらの人の言葉があちらの人に伝わりそうになかったら、私たちの視点を通して一度再解釈して翻訳する——そういう役割が、図図倉庫のやっていることに近いと思います」

図図倉庫は答えを示す場所ではありません。これまで出会わなかった人や考え方に出会い、新しい発見をする場所なのです。

矢野さんは将来について、次のように語ります。

「同じようなことが起きたときに、『福島のようにになってしまう』ではなく、『飯館村のように取り組めば再生できるかもしれない』と思ってもらえたらうれしいですね」

実験できる余白があること。失敗を恐れず挑戦できること。そして異なる人たちをつなぐ翻訳者がいること。

図図倉庫では今日も、新しい出会いと挑戦が生まれています。



● 双葉のゲートウェイを目指して 一人と地域をつなぐ新たな拠点 ―

今年6月、双葉町に「FUTATABI FUTABA FUKUSHIMA」が開業しました。復興が進む双葉町に誕生した、新たな交流拠点です。

ホテルを運営する大和ライフネクストの練生川総支配人にお話を伺いました。

「理想は、このホテルが地域のゲートウェイになることです。『浜通りへ行くなら、まずあのホテルに行ってみよう』、そう思ってもらえる存在になりたい。ここを入口に、地域を知ってもらいたい」

福島県復興祈念公園 国営追悼・祈念施設の整備や企業の進出、福島国際研究教育機構（F-REI）の活動などによって、今後、双葉町を訪れる人はさらに増えていくことが期待されています。その中で、人々を迎え入れる拠点や交流の場の重要性がますます高まっています。

「当初はビジネス利用が中心でしたが、夏以降は首都圏から訪れる夫婦や家族連れが増えています。『今の双葉を見てみたい』という理由で訪れる人も少なくありません」

練生川さんは、スタッフ自らが地域の魅力を紹介し、来訪者と地域をつなぐ役割を担いたいと考えています。

また、地域の食材を活用したレストラン運営にも力を入れています。『またあの料理を食べたい』と思っていただけるレストランになることも理想の一つです」

さらに、双葉町だけでなく浜通り全体の連携の重要性についても語ります。

「交流人口や関係人口を増やすためには、自治体や事業者がそれぞれに取り組むだけでなく、地域全体を横につなぐ仕組みが必要です」

人々が地域と出会う入り口として、「FUTATABI FUTABA FUKUSHIMA」が紡ぐ新たなつながりは、いま始まったばかりです。



ホテル内のレストランスペース



ホテルの外観

提供：大和ライフネクスト株式会社

● 第13回知のネットワーク会合を開催しました！

8月27日、国立研究開発法人産業技術総合研究所 中央事業所共用講堂にて実施された第15回環境放射能除染研究発表会の企画セッションとして、第13回知のネットワーク会合を開催しました。

今回は、「復興再生利用・県外最終処分に関する理解醸成活動～個人の考え方の違いを踏まえた最適なアプローチとは～」をテーマに、「正しい情報を伝えれば、理解につながるのか」という問いを出発点として議論しました。

まずJESCOから、中間貯蔵施設見学会や中間貯蔵事業情報センターなどにおける理解醸成の取組を紹介しました。

続いて、東北工業大学の泊尚志氏から、人は情報の正確さだけでなく、安全性や公平性、発信者への信頼なども踏まえて判断することについて、北海道大学の太沼進氏から、科学だけでは答えを出すことが難しい課題だからこそ、多様な立場の人による議論が重要であることについて講演がありました。

総合討議では、立教大学の森朋子氏がモデレーターとなり、現地見学や対話の役割について意見を交わしました。その中で共有されたのは、理解醸成とは単なる情報提供ではなく、人々が課題を自分事として考えるきっかけをつくることが重要であるという考え方です。また、

現地見学や対話を通じて信頼関係を築き、多様な価値観や懸念に向き合う必要があることも示されました。

さらに、県外最終処分に向けては、候補地が示された後の地域との対話だけでなく、候補地選定の前段階から進め方やルールについて社会全体で議論していくことの重要性が共有されました。



発表資料はJESCOのホームページで公開しています。



第13回知のネットワーク会合の様子

情報センターだより

▼見学者アンケート

●科学的な根拠に基づく安全性と現地の人の復興への情熱や想いを上手く言葉にすることが大切だと思う。身近な人に自分の言葉で伝えることで、想いも伝わりやすくなる。そのような会話を広げていくことが大切。 10代/静岡県

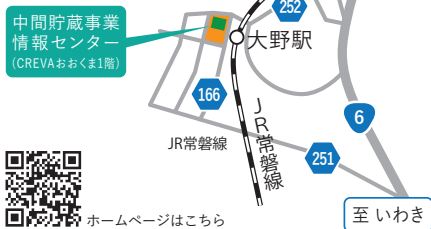
●全国の小中学校や地域コミュニティでも放射線に関するセミナーを多く開講した方がよいと思いました。 10代/埼玉県

●被災地の問題は全日本の問題だと認識するべき。他人事と思わないで、もっと関わるべき。 50代/兵庫県

▼情報センター見学のご案内

中間貯蔵事業情報センターは無料で見学できます。

中間貯蔵施設見学は事前に予約が必要となります。



ホームページはこちら
福島県双葉郡大熊町大字下野上字大野 116 番 5
開館時間▶9:00～17:00（最終入館 16:30）
休館日▶毎週火曜日（祝日の場合は翌平日）、
年末年始（12/29～1/3）

編集後記



中間貯蔵施設区域内では、アケビの実が熟し始めています。今号では、人と地域をつなぐ取組や対話の重要性を紹介しました。実りの秋とともに、地域の動きもお伝えしていきます。